

学内公募型常設オープンスペースにおける 「食の講習会」の試み

— 親子分離型実習における参加者の意識に着目して —

富田 道子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

本研究の目的は、2014年度に試行した「食の講習会」の成果と課題を明らかにすることにある。質問紙調査および聞き取り調査の結果は、以下の通りである。第一に、質問紙調査において、すべての参加者から「講習会の内容を家庭でも生かそうと思う」「今後も講習会に参加したい」という回答が得られ、参加費用や講習会の時間についても概ね満足していることが明らかになった。第二に、感想の自由記述から、参加者は本講習会を好意的に受けとめていることが推察された。第三に、参加者が各回の講義内容に関心を寄せていることも明らかになった。第四に、食の講習会が単なる調理実習に留まらず、オープンスペース利用保護者への継続的な支援につながる可能性も示唆された。第五に、地域連携実習において、地域の方の参加者への声かけが参加者を励ます力になっていることが明らかになった。第六に、聞き取り調査から、親子分離型実習への参加の鍵を握っているのは、保育士とオープンスペース利用者の日常的な関係にあることが明らかになった。

キーワード：地域子育て支援拠点事業、オープンスペース、食の講習会、親子分離型実習

はじめに

(1) 研究の背景

2007年、厚生労働省は子育てをめぐる家庭状況を①3歳未満児の約7～8割は家庭で育てられている、②核家族化は一層進行し、地域のつながりは希薄になっている、③男性の子育てへの関わりは少ない、④孤立したなかでの子育てと、それによる親の不安感、負担感の増大、⑤子どもの多様な大人・子どもとの関わりの減少、と捉え、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場の一つとして地域子育て支援拠点事業実施要綱を作成、告示した。

2015年現在、地域子育て支援拠点事業は全国6,538か所で実施されており、2014年7月に事業を開始した広島都市学園大学内にある「公募型常設オープンスペース」（以下、オープンスペースと称す）もその一端を担っている。

本学オープンスペース利用者を対象とした第1回質問紙調査を2014年7月から9月に実施したところ、子どもについての気がかり・心配ごととして119名中64名（53.8%）が「食事」を挙げ、なかでも「子どもの食べ方」「離乳食の進め方」に関するものが多いことが自由記述から明らかになった。ただし、記述内容を精査すると、調理方法・技術も含め、

子どもが「食べない」ではなく、発達段階に合わずに子どもが「食べられない」状況や、利用保護者が多くの情報に戸惑っている様子が推察された（富田（2014）参照）。

そこで、2014年度は質問紙調査結果を参考に「食の講習会」を4回試行した。

（2）研究の目的

本研究の目的は、試行した「食の講習会」の成果と課題を明らかにすることにある。

先行研究によると、大学の子育て支援拠点事業における調理実習は親子参加型講習会の形がとられており（富田（2014）参照）、親が調理実習をしている間、子どもはオープンスペースにいるという親子分離型実習は未だ報告されていない。

そこで、本稿では2014年度に実施した4回の「食の講習会」における参加者の満足度を報告するとともに、親子分離型実習を体験した参加者の意識に着目しながら、本実習における成果と課題を明らかにする。

1. 研究方法

（1）調査対象者・調査時期・調査方法

食の講習会は、2014年9月18・19日、10月2日、11月27日の計4回実施した。

参加者は、9月が各5名、10月が9組18名、11月が8名である。

まず、各回の講習会実施終了直後に簡単な質問紙調査を実施し、その後、聞き取り調査も実施した。質問紙の内容と回答方法について、「講習会内容をご家庭でも生かそうと思いますか」「今後も講習会に参加したいと思いますか」の問いには「はい」「いいえ」で、「会費はいかがでしたか」の問いには「安い」「ふつう」「高い」のいずれかで、「講習会の時間の長さはいかがでしたか」の問いには「もっと短いほうが良い」「ちょうど良い」「もっと長いほうが良い」のいずれかで回答するものとした。さらに、講習会の感想や今後の要望などを自由に記述できる欄も設けた。

聞き取り調査の対象者は、9月の講習会参加者のなかで、その後オープンスペースで会う機会があり、同意を得られた6名である。子どもの年齢は、生後10ヵ月から1歳5ヵ月までである。なお、事前に聞き取り調査の概要を文書で手渡した。

聞き取り調査場所は、親子がリラックスした状態でいられるオープンスペース内とした。聞き取り調査の日は、利用保護者の都合や子どもの体調などを考慮して事前に設けず、次回オープンスペースに来られた時に実施することを約束した。

本調査実施中、子どもは親のそばにしながら、あるいは保育士や保育アドバイザーの本学教員が子どもを見守り、場合によっては保育士、本学教員が子どもと一緒に遊ぶといった協力が得られた。

調査内容は、親子分離型実習を体験しての感想である。具体的には「講習会の1時間半、子どもと離れて実習をすることについて」、次に「当日の朝」、「保育士に子どもを預けるところから講習会終了まで」と時系列で、その時の保護者自身の思いや感想を自由に話し

てもらった。

なお、倫理的配慮として、調査にあたっては広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：第2014023）。手法は半構造化面接法とし、所要時間は20分程度とした。また、調査対象者の許可が得られたため記録はICレコーダーに録音した。

（２）分析方法

質問紙調査における回答は、その数を集計し、記述部分は整理して、食の講習会全体の満足度を確認した。

聞き取り調査における回答は、まずICレコーダーに録音した内容からトランスクリプトを作成し、対象者一人ひとりの質問に関する回答をトランスクリプトから抜き出してカードにした。その後、コーディングによって小グループを作り、類似した小グループを集めてカテゴリー化した。なお、カテゴリー化にはKJ法を用い、同じような反応をした対象者の人数は表6の発話例の横に記した。最後に、上位カテゴリーの反応数を集計した。これらの結果から、食の講習会の成果と課題を検討した。

２．食の講習会

（１）概要

2014年度に実施した食の講習会の詳細は表1の通りである。

実施時間は10時30分から11時45分とした。費用は9月が200円、10月が100円、11月は400円であった。

第1, 2回のだしの講習会では、摂食機能の発達と支援について簡単な説明をした後、だしの旨みや香りを体験し、味噌汁をつくるプログラムを親子分離型実習として実施した。

表1 食の講習会概要

	第1回	第2回	第3回	第4回
実施日	9月18日（木）	9月19日（金）	10月2日（木）	11月27日（木）
講習会名	だしのパワーを体験ー味覚・嗅覚を育てよう		親子ふんわり団子作り	地域の先輩女性に教わろう
対象者	利用保護者のみ		利用親子	利用保護者のみ
参加人数	5名	5名	9組	8名
実施時間	10:30～11:45			
講義・ 示範	摂食機能の発達と支援 楽しく食べる		使用する材料の説明 咀嚼と嚥下 食べる時の環境・応急処置	地域の方による 鯉の三枚おろしの実演と 地域の方の魚の食べ方を レクチャー 担当教員が全体説明
実習内容	①5種類のだしを取る ②3種類の味噌（白味噌、合わせ味噌、赤味噌） から1つ選び、味噌汁作り ③参加者で飲み比べ		保育実習室にて 親子でお団子作り	鯉のムニエル風 のつべい汁 ごはん

第3回の団子作りの講習会では、保育所における団子誤嚥事故を念頭に、咀嚼・嚥下、食べる環境づくり、応急処置などの説明後、親子一緒に豆腐入り団子を作るプログラムを実施した。

ここでは、小さな子どもを抱えた状態で参加保護者が加熱調理をするのは危険であるため、本学子ども教育学部1年次のボランティア学生が2グループに分かれ、1グループは団子を茹でる係、もう一方のグループは保育士の指導のもと、団子の茹で上がりを待っている親子へ遊びを提供した。遊びの内容は、食べ物をテーマにした手遊び、ペープサート、絵本の読み聞かせである。

第4回の講習会は地域の方が主体となって献立を作成し、当日も講師になっていただくプログラムを親子分離型実習として実施した。献立は「鰯のムニエル風」「のっぺい汁」「ごはん」である。本親子分離型実習の第1、2回講習会との違いは、料理が出来上がったところで参加者にオープンスペースへ子どもを迎えに行ってもらい、一緒に試食をする形式をとった点にある。

なお、親子分離型実習にあたっては、保育士を1名増員し、オープンスペース内に保育アドバイザーの本学教員も入るなど、保育体制を整えることで講習会が実現した。

(2) 地域連携

第4回の講習会は、大学周辺地域の方との交流をめざし、大学所在地である広島市南区の宇品公民館で活動する地域の18グループに食の講習会への参加、協力要請をした。具体的には、2014年度の公民館学習グループ全78団体のうち、公民館主査が紹介した、男女問わず料理好きの人が在籍する18グループの代表者に、8月初旬、筆者が参加、協力依頼文書と返信はがきを同封したものを公民館を通して渡した。その結果、9グループから返信があり、そのうち2グループから食の講習会への協力について承諾が得られた。

8月下旬、この2グループの代表者と連絡を取り、宇品公民館で各グループメンバーへ講習会の趣旨と概要を説明した。当初、早期に打ち合わせができた1グループに11月の講習会を、もう1つのグループには2月に講習会を実施依頼し準備を進めていたが、2月の講習会は降雪や感染症の広がりから企画自体を中止せざるを得ず、実施は2015年度に延期した。

各団体との打ち合わせでは、①広島の食材を使用する、②離乳食にも応用できる、の2点を実現するような献立を依頼した。地域の学習グループから提示された献立は筆者が試作し、材料の分量や調味料の調整を行い、再度、代表者へ戻し試作・検討を依頼した上で最終的な献立を決定した。

3. 結果と考察

(1) 質問紙調査

各回の食の講習会終了後、簡単な質問紙調査を実施したところ、「講習会の内容を家庭

でも生かそうと思う」「今後も講習会に参加したい」の項目に、すべての参加者が「はい」と回答した。また、参加費用についての4回の平均割合は、「安い」が46.2%、「ふつう」が53.8%、講習会の時間についての平均割合は、「ちょうどよい」が88.5%、「もう少し長くてもよい」が11.5%と、概ね満足したことがわかった。

(2) 感想の自由記述

第1, 2回のだしの講習会の感想では、「だしがワンパターンになりがちでしたので、色々試していこうと思います」「子どもにも味わわせてあげたいと思いました」など、色々なだしの取り方やそのおいしさ、香りを実感できた記述がみられた。また、「調理方法を見直したい」「口の動きを教えてもらったので、子どもの口をよく観察してみます」「発音の仕方がかむことやのみ込む動作につながっていることなど興味深かったです」のように、講義内容に関心を寄せた記述もみられた。さらに、ゆっくり食事をする機会がなかったため、講習会に参加したことで気分転換になったという記述もあった(表2)。

第3回の団子作りの講習会の感想では、まわりを気にせず、楽しく参加できたことがもっとも多く記述されていた。実施場所が保育実習室であったため子どもが自由に動き回れたこと、参加者同士が気軽に会話できるような環境設定にしたことに加え、子どもの見守り役として保育アドバイザーである本学教員、ボランティア学生が入ったことで、参加者がリラックスできたのではないかと思われる。また、「安心して食べさせられる食事や環境づくり、これからも教えて下さい」のように、講義内容に関心を寄せた記述もみられた。さらに、前回から継続して参加した方の「食事をゆっくり、ゆったりした気持ちでとれる

表2 第1・2回だしの感想

記 述 例
とても丁寧でわかりやすい内容でした。 だしがワンパターンになりがちでしたので、色々試していこうと思います。
自分の調理方法を改めて見直したいと思います。
普段とったことのないだし汁や、使ったことのないおみそを味わえたので、とても感動しました。 ぜひ家でもやってみたいと思います。 口の動きを教えてもらったので、子どもの口をよく観察してみます。
だしを比べるということをしたことがなかったので、とても面白かったです!! 家では白みそや煮干しだしも使わないので、この機会に試させてもらって、ぜひ子供にも味わわせてあげたいと思いました。
楽しかったです。発音の仕方がかむことやのみ込む動作につながっていることなど、興味深かったです。 だしも簡単にできて、飲み比べもとてもおもしろく、これから食事をするときには何のだしにしようか…と いろいろ変えるのも楽しいなと思いました。 最近、食事もうつかり味わえなかったもので、5種類のだしとお味噌をじっくり味わえて、とてもおいしかったです。
いつもバタバタしながら食事をとっているもので、ゆっくりだしの味を確かめることができなかったが、初めて子どもと離れてゆっくりと、色々な味を試すことができ良かったです。 少し気分転換になりました。改めて、食の大切さを教えていただきました。ありがとうございました。

表3 第3回 団子作り感想

記 述 例
汚しても自由に遊べたので、とても良かったです。今回みたいな親子で参加できる講習会を続けてほしいです。
子どもと楽しみながら作れるレシピを、たくさん知りたいです。
とてもいい機会になりました。安心して食べさせられる食事や環境作り、これからも教えて下さい。この講習を受けるようになってから、食事をゆっくり、ゆったりとした気持ちでとれるようになりました。おみそもとってもおいしくて、気持ちがほっこりするおみそ汁は、生まれて初めてでした。
子どもたちを連れている方ばかりなので、子どもがウロウロしてもお互い様でとても良かったです。子連れだとなかなか参加できないので、とてもありがたいです。
あまり食に興味がないので、一緒に作ったら食べるようになるかなと思い、参加した。思ったより興味を持ってくれず、残念だった。試食の時は、最初はよく食べてくれたのでよかった。
シンプルなレシピで、家庭でもすぐできそうで良かったです。保育士の先生方が子どもをみて下さるので、安心して講習を受けることができました。学生の方のフォローも良かったです。

表4 第4回 地域連携実習感想

記 述 例
地域のお料理をもっと教えてほしいです。
いろいろ教えていただける機会がうれしかったです。三枚おろしは、家でもやってみます。
い〜ぐるに相談したりと、助かっています。知らない料理を覚えられて良かったです。ありがとうございました。
魚のさばき方を教えて頂き、大変参考になりました。ありがとうございました。
初めて三枚におろしたので、とても勉強になりました。先生方とのお話も楽しく、参考になりました。また、参加したいです。
今回の調理以外のことも教えて頂いたので良かったです。

ようになりました」の記述から、この参加者の子どもの食に対する気持ちが寛容になってきていることが推察された(表3)。一方、本講習会では、子どもが食事に関心がないことを心配する保護者もあり、その後、筆者がオープンスペースに入った際には、子どもの食事の様子などについて声をかけるよう努め、保育士も子どもの小さな変化を見逃さず、子どもの成長を喜ぶ声かけを続けた。

第4回の地域連携講習会では、試食の際に『地域の方とおしゃべり会』の時間を設定したため、感想を書くための十分な時間がなかったが、世代を越えた交流を持つことの良さは「地域の料理をもっと教えてほしいです」「いろいろ教えていただける機会がうれし

表5 地域の方の声

発 話 例
三枚おろし経験者が3名しかいなかったけれど、皆さん、上手におろせて素晴らしいです。
だし汁がおいしいというのは、大事なことですよ。
自分たちが若い頃は、母親は子どもと常に一緒にいないといけなと思って（思わされて）きたけれど、子どもと離れてこういうところで勉強するというのは、大事なことです。
ここに来られるお母さんたちの住んでいるところは、おそらく「町内会」が存在しないところだと思う。宇品には伝統行事が残っていて、子どもが楽しめるお祭りもある。町内会がないということは、回覧板がないということでしょう。いーぐるがそのような行事を知れる場所になってもらえるとうれしいわ。
今日の「のっぺい汁」は、離乳食にも使える。離乳食って老人食と同じなんですよ。
子どもが大きくなれば、いくらでも肉をたくさん食べる機会がある。だからこそ、子どもが小さいうちは、魚をしっかり食べさせてほしい。刺身は離乳食にはもってこいの材料。火を通すだけでいいし、骨の心配をしなくてもいいので。

かったです」など、記述に表われていた（表4）。また、これら参加者の感想の背景には、実習中に「皆さん、（魚を）上手におろせて素晴らしいです」「今日の『のっぺい汁』は、離乳食にも使える。離乳食って老人食と同じなんですよ」のように、地域の方の参加者への声かけがあったことが関係していると推察される（表5）。

（3）聞き取り調査Ⅰ—対象者の回答分析—

9月の講習会参加者で同意を得られた6名を対象に、聞き取り調査を実施した。その回答をカテゴリー化したものが表6である。

回答は大きく5つに分類することができた。まず『参加の背景』で、調査対象者6名のうち、2名がまもなく育児休業制度の利用が終わり、子どもの保育所入所時期が近づいていること、もう1名は他の施設の料理教室で子どもを預けて実習をした経験があることがわかった。

『安心・信頼』では、子どもと離れて実習をすることについて、日頃から利用しているオープンスペースであること、保育士に慣れていること、家庭科調理室がオープンスペースの場所と比較的近いことが、保育士への安心感やオープンスペースへの信頼感を生み、参加につながっていることがわかった。

ただし、対象者に子どもと離れることへの不安がなかったわけではないことが『分離不安』で確認できた。とりわけ「申し訳ないという気持ち」は、当初、育児は母親がするべきという思いが根底にあったの発話と思われたが、この対象者はまもなく職場復帰をする予定である。あと少ししか子どもと二人でいられない、育児休業中だけでも二人きりの時間を楽しもうと思っていたからこそこの発話とも考えられる。いずれにしても、20分程度

表6 聞き取り調査結果：親子分離型実習を体験して

カテゴリー（上位・下位）	発話例（トランスクリプトから抽出）
参加背景 就園準備	<ul style="list-style-type: none"> ・いま育休中で、間もなく保育園生活が始まるので、親子が離れる初めての経験だったのですが、その意味でも今回の機会は良かったです。 ・4月から仕事に復帰するので、予行練習みたいな気持ちでした。
他施設での実習体験	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでも、他のところで親子離れて実習をしたことがあって、準備から後片づけまでで3時間ぐらいいはみてもらっています。その間、子どもの食事はお弁当です。そのような経験があるので、大丈夫だと思っていました。
安心・信頼 保育士への安心感	<ul style="list-style-type: none"> ・いへぐるによく通っていたから、スタッフの方とも慣れていたんで、子どもと離れることについて心配や不安はなかったです。（7） ・保育士の方に慣れていたし、ぐずって泣くことなく、楽しく遊んでいる姿をいへぐるで見えていたので、親子が離れることに関しては心配なく、安心して任せられました。 ・講習会后、保育士さんに抱っこされて寝ていたんで、いい子でいてくれたんだあとホッとした気持ちになりました。（4） ・いろいろと外部には有料で子どもを預けるところがあるけれど、ここは日頃から使っている施設。だからこそ、安心できたんだと思う。
環境	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの居場所と親の活動場所が近かったんで、安心でした。（2）
分離不安	<ul style="list-style-type: none"> ・大丈夫と思う反面、うちの子は歳の離れた子が苦手なので、その日はいつもと違い、年上のお子さんが多く来られていたので、それが少し心配でした。 ・泣いてないかな、と思いましたが、子どもの姿が見えたら気になります、見えないから気持ちの区切りになりました。 ・開始前は、申し訳ないなという気持ちや不安な気持ちがよぎりました。
分離決意 励ましと自身を鼓舞	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の朝は「おいしい料理を作るために、お母さんががんばってくるね」と子どもに声をかけました。 ・当日の朝は「勉強してくるから、先生と遊んで待ってね」と声をかけました。
私的時間の確保 解放感	<ul style="list-style-type: none"> ・1歳くらいから後追いを始めたので、しばらくお休みしていました。なので、子どもを預けたい気持ちがありました。一人で行動できるのは、すごく久しぶり。 ・エレベーターに乗った時、解放感がありました。（筆者注：家庭科調理室は2階にある）
自分の時間	<ul style="list-style-type: none"> ・集中して参加することができ、試食の時、子どもにどうやって食べさせようかと考えた瞬間にハッと思い出したぐらいです。 ・料理中は気にしていなかったです。（2） ・これからも、ぜひ離れたい。託児が有料であっても預けたいです。
離れても大丈夫	<ul style="list-style-type: none"> ・親を気にせず、いつも通り遊べて、預けても大丈夫と思うことができました。 ・保育士さんから「遊んでいましたよ」と声をかけていただいて、もっと預けようと思いました。
学び	<ul style="list-style-type: none"> ・知識を得たことは、気持ちに少し余裕ができたり、自信につながると思います。

注）カッコ内の数字は、言及者数を示す。対象者は複数のカテゴリーにあてはまる言及を行っているため、言及の総数は分析対象者となった6名を超えるものとなっている。

の聞き取り時間のなかで、発話の背景にある対象者の気持ちを十分に引き出すことは難しかった。今後の検討課題としたい。

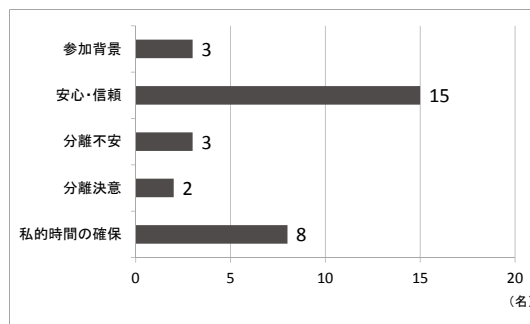
『分離決意』では、講習会当日の朝、子どもに何か声をかけましたか、の問いに対して、2名が子どもに「がんばってくるね」「勉強してくるから」と声かけをしており、これらの対応に子どもへの励ましと自身を鼓舞する様子が窺えた。

『私的時間の確保』では、講習会の始まりから終わりまでをふり返った回答から、これ

まで育児に追われ私的な時間がなかなか持てなかった対象者が、講習会参加により気分転換ができたことが推察される。とりわけ「一人で行動できるのは、すごく久しぶり」や、講習会開始前に「申し訳ない」気持ちが悪かった対象者が、その後「エレベーターに乗った時、解放感がありました」と話しているところに、気分転換ができる機会や私的時間を求める心情が表れていると思われる。

（４）聞き取り調査Ⅱ—上位カテゴリーの反応数—

聞き取り調査対象者６名のカテゴリーの反応数を集計した結果は、図１の通りである。



(親子分離型実習を体験しての感想他)

図１ 上位カテゴリーの反応数

反応数がもっとも多かったのはカテゴリー『安心・信頼』であり、次いで『私的時間の確保』であった。

食の講習会を計画した当初、親子分離型実習の成功の可否、参加申し込み数などを危惧していたが、図１の結果から、参加の鍵を握っているのはオープンスペース、つまり保育士と利用保護者の日常的な関係にあることが明らかになった。この関係性の構築が基盤にあることで、「子どもを預けても安心」「何かあっても助けてくれる」から、「安心して食の講習会に参加できる」「自分の時間が確保できる」「気分転換になる」ことが推察された。

４．まとめと今後の課題

食の講習会参加者に質問紙調査および聞き取り調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、質問紙調査において、すべての参加者から「講習会の内容を家庭でも生かそうと思う」「今後も講習会に参加したい」という回答が得られ、参加費用や講習会の時間についても概ね満足していることが明らかになった。

第二に、感想の自由記述には、様々なだしの取り方やそのおいしさ、香りを実感でき、親子楽しく参加できたこと、また、世代を越えた交流を持つことの良さなどが記されており、参加者が本講習会を好意的に受けとめていることが推察された。

第三に、参加者が各回の講義内容に関心を寄せていることも明らかになった。

第四に、「講習会に参加したことで気分転換になった」や「食事をゆっくり、ゆったりした気持ちでとれるようになりました」の記述や、親子団子作りの実習中、子どもが食事に関心がないことを心配する保護者の声から、食の講習会が単なる調理実習に留まらず、オープンスペース利用保護者への継続的な支援につながる可能性も示唆された。

第五に、地域連携実習において、地域の方の参加者への声かけが参加者を励ます力になっていることが明らかになり、それが参加者の地域の方との交流を望む声につながったと推察される。

第六に、聞き取り調査から、親子分離型実習への参加の鍵を握っているのは、保育士とオープンスペース利用者の日常的な関係にあることが明らかになった。この関係性の構築が基盤にあることで、「安心して食の講習会に参加できる」「自分の時間が確保できる」「気分転換になる」ことが推察された。

今後は、本調査結果を踏まえた上で食の講習会の内容をさらに検討していくとともに、親子分離型実習が難しい1歳未満の子どもを持つ保護者との関わり方の検討、保育士との一層の連携、さらに、引き続き地域連携実習を計画しながら、保護者同士はもちろん、保護者と地域の方との交流を促す機会をつくっていきたい。

【謝辞】

質問紙調査、聞き取り調査にご協力下さいました食の講習会参加者の皆様と、本事業に携わる保育士、そして、事業を支えて下さる宇品公民館と地域のサークルの皆様、本学の教職員に厚くお礼申し上げます。

参考文献・引用文献

- 財団法人こども未来財団. 子育て中の母親の外出時等に関するアンケート調査結果（抜粋）, 2004. p.3-4
厚生労働省. 地域子育て支援拠点事業実施状況（交付決定ベース）. (http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoutoujidoukateikyoku/kyoten_kasho26.pdf, 2015. 12. 1 閲覧)
富田道子（2014）大学地域子育て支援事業の役割に関する一考察・利用者への質問紙調査から、広島都市学園大学子ども教育学部紀要, 1（1）, 61-70.